論説

豊前・豊後の古名刀工

―神息、長円、定秀、行平―

山内美徳

はじめに

そもそも日本刀という呼び方は、その名が示すとおり我国独特の鍛練法で製作された刀剣類をさす。すなわち、低温で処理された炭素鋼を材料としており、これに折り返し折り返し鍛練を加えて硬度の高い純一な皮金をつくり、別に庖丁鉄に数度の折り返し鍛練を加えて心がねとし、硬い鋼の中に軟らかい心がねをつつみこんで打ち延ばし、それに土取りを行ない焼き入れを施したものである。この結果、実用的には折れず、曲がらず、よく斬れるという性能を完全なものにし、美術的には、美しい地文、華やかな刃文がみられる。刀剣は現代でこそ工芸美術品の範疇になっているが昔日においては、実用品であり、かつ、重要な武器であった。それゆえ其の時代の人情風俗とか戦術戦法方式とかが極めて敏感に作品に反映されており、しかも製作材料から製作地方の特色が顕著にあらわれる。いいかえれば、その現われた姿体によって地方と時代を窺知することができ、鍛練の方法、刃文の状態によって系統、さらには個々の特色をも知ることができる。

ここでは宇佐神宮社僧であった「神息」、大和国千手院より当国へ移住したと伝えられる「長円」、「僧定秀」、国宝「古今伝授の太刀」（永青文庫所蔵）の作者として名高い「豊後国行平」について概説を試みることとするが、はじめに刀剣史について概説する。

国家珍宝帳（東大寺献物帳）の中に唐太刀とか高麗剣などの語が散見され、これらの舶載刀が、当時特に貴珍なものとされたことがわかる。これに対して唐様の太刀、高麗様太刀と呼ばれているものもあり、明らかに大陸からの舶載刀の模造をして

いたことが理解される。この時代大陸から移住してきた人々を韓鍛冶と呼び、これに対してわが国伝統の鍛冶を倭鍛冶部と称していた。この韓と倭との両鍛冶部の長短取捨の研究の結果が日本刀の完成になったと思われる。

一、上古時代

上古刀には種々な型があるが「平造」と「両切刃造」に大別できる。現存するもののほとんどが土中より発掘されており、これらはすべて考古学の分野に属する。作柄は有名な師霊剣のような七尺もある長大なものもあるが、普通は二尺七、八寸ぐらいで、いずれも反りのない直刀、刃区はあるが棟区のないものが多い。両切刃造の切刃が棟の方へ寄ってきて鎬となり、現代の日本刀のような型に移行したと思われる。東大寺正倉院にこの時代の「刀子」と呼ばれる平造りの短いものが保存されているが、これが短刀の母体と思われる。この時代の遺例として小村神社伝来の環頭太刀（五世紀頃）、聖徳太子愛用とつたえられる丙子椒林剣、七星剣が大坂四天王寺に、つづいて奈良時代のものが、正倉院に保存されている。

二、平安時代

上古時代では直刀であったが、当期初期においても直刀が基本であった。日本人の習性として、斬る、打つ、叩くという動作を特技としており、これらの特質を満たすために反りのある太刀が採用されるようになった。と同時に、この時代頃より従来の徒歩戦が主であった戦闘方式から騎馬戦に変化したことも大きな影響があったと思われる。当期の太刀姿は、一見宝刀視すべき優美典雅なもので、踏張のある姿である。この時代彫刻のある作品は稀であるが、豊後定秀の太刀に桜の彫刻があるのは非常に名高い。当期活躍した刀工は次のとおりである。

山城国　宗近、吉家、有国、兼永、国永

大和国　行信、行吉

備前国　友成、正恒、包平、助平

備中国　安次、守次

伯耆国　安綱、真守、守綱
豊前国　神息、長円
豊後国　僧定秀
筑前国　良西
薩摩国　正国、行安、行正
陸奥国　安房、雄安、森房、有正

三、鎌倉時代

源平両氏の度々の大戦に刀剣の大需要がおこり、刀工の数も増え幾多の戦争経験を重ねた結果、刀剣製作上の技術の向上を見、驚異的な発達をとげた時代である。この時代特筆すべきことは、後鳥羽上皇の刀剣鍛造奨励であった。『承久記』に「……次家、次延に作らせて御手づから焼かせ給ひけり、公卿、殿上人、北面、西面の輩、御気色よき程の者は皆給はりて帯びけり……」とあるように院中、又は、水無瀬宮において趣味の道にことよせて、全国の名工を呼び集め、御番制度を定め、位階、所領を賜わるなどの破格の優遇を与えたので、刀工の地位の向上、生活の安定は必然的に日本刀の黄金時代を招来した。当期の太刀姿は、初期、中期、後期と大別されるが、特に中期においての猪首切先太刀の出現と、短刀製作が隆盛であったことは注目すべきことである。刀工の分布状況は全国に及んでおり、伝統的な備前、山城、大和に加えて相州鍛冶の繁栄が顕著である。当期活躍した刀工は西国のみについて挙げれば次のとおりである。

筑前国　西連、実阿、左文字　国弘
筑後国　三池光世、利延
肥後国　延寿国村、国泰、国時
豊後国　行平、正恒

大分県における最古の刀工は、大和国の天国とともに日本刀のごく古い鍛冶の一人とされる宇佐神宮社僧であったと伝えられている「神息」があげられる。同工については、古銘鑑によれば和銅とか大同年間とかの時代を伝えているが、その当時はまだ直刀時代であり、かつ、それと首肯できる遺例が現存しない。強力な史料のないかぎり、平安末期若しくは鎌倉初期まで時代を下げねばならないと考える。

『本朝鍛冶考』に「元明御宇和同(マヽ)霊亀宇佐宮人銘ニ宇佐八幡宮神息ト有或九十九刀ノ内八刀ニハ銘ス剣ヲ分テ初メテ刀ト為凡人ニ非ズト又曰平城御宇ノ七ノ宮守刀ハ長名ニテ鍛冶一生不犯千日煉テ造ヨシ記ス城戸駿河守持秀太刀雷電ノ銘ハ一書ニ豊前国宇佐神息ト云。今按息・神息・神来・宝幡皆同人ナルベシ神息ト云八幡宮ト云者有ベシ」と誌されている。奈良時代において豊前国や宇佐八幡宮に関係ある国史上の大きな政治的事件として養老四年から七年にかけての隼人征伐、天平九年から同十二年にかけての藤原広嗣の反乱、神護景雲三年から宝亀三年にかけての道鏡の事件等これだけの大事件に対応できるだけの武器の調達が可能であった。すなわち「神息」をはじめ数多くの鍛冶が存在していたことは十分考えられる。加えて宇佐八幡宮のご神体が、鉱物の運搬に専ら利用された薦であることや、天平十五年聖武天皇の大仏造立の詔に端を発した大仏の鋳造においても、宇佐八幡宮が大いに関係をもったこと等からしても、この地には優秀な鋳造技術をもっていたことがわかる。思うに前出の『本朝鍛冶考』にある「按息」、「神来」、「宝幡」等は別人であり、もともと「神息」と同じ鍛冶であった。その鍛冶集団の中でも、「神息」が傑出し名工であったと同時に同名が継承されたこと。「宇佐託宣集」をはじめその他の古文書中に「鍛冶翁」なる語が散見されること。これらから後世、鍛冶は皆「神息」同人とみなされるようになり、さらに「鍛冶翁」までも同人とみなされ偶像化されたと思われる。また、「太宝令」の営繕令において刀剣に作者名、製作年を銘切りすることが義務づけられた際、宇佐神宮に属する鍛冶は「神息」という鍛冶銘に統一されたとも考えられるが、何分にも当時と鑑せら

れる作刀および史料が現存しておらず、どこまでも推測の域を出ない。長安寺太郎天童胎内銘をはじめその他の文書中に宇佐宮関係の社僧、供僧の中に、神禅、神敬、神行、神要等「神」の字が多いのも、社僧であったと伝えられる「神息」の存在を裏づける資となろう。

宇佐神宮本殿背後の崖下、菱形池の奥に、俗に鍛冶屋敷とよばれているところに御霊水と呼ばれる古井戸がある。石を敷きつめた中に三つの井戸が浄水を満々とたたえている。「神息」はここに住み、この水を鍛練に用いたとの伝説がある。菱形池の補修工事の際、池底にも古井戸の井桁が三つあったとの報告もある。また、神宮から二キロメートルほど東に行った宇佐市日足にも鍛冶屋という字があり、地元では「神息」の故地と伝えている。

「神息」の遺例としては、もと伊勢神宮の御師の家に伝来し、現在重要美術品に認定されている鎬造の太刀で、身長八一、一センチメートル、磨り上げて中心先に「神息」と銘のある一口が宇佐神宮に所蔵されている。作風はすべて、「古波平」、「定秀」、「行平」に共通しており、時代は鎌倉初期を下らぬと思われる。

また、本阿弥光温指料として大徳川家に伝来した表裏に刀樋を掻き、その中に表に三字裏に二字の梵字を陰彫し、刀樋には添樋をも添える濃厚な彫刻があって身幅広く、反り少なく、直刃で区際を焼き落し、地鉄は肌立ち板目肌である短刀で鎌倉末期とみられるものがある。このように極めて少数であるが、時代をへだてて、それと思われる作刀が伝来していることよりして、すくなくとも一人とは考えられず、当然のことながら名跡の継承があったと思われる。

長　円

『銘尽』『校正古刀銘尽』等によると、「長円」は大和国千手院に属していた法師鍛冶で永延の頃、豊前国彦山や国東半島の豪族紀氏の招きに応じて当国に下り、糸棚や瑾城寺などに住し鍛刀したとされている。また、宇佐神宮にも属していたとある。古来より当国は、彦山、宇佐、国東半島の六郷満山文化などが互いに影響し合いながら一つの文化圏を成しており、その中心に刀工の移住や交流があって、各々の居所を明らかにすることが非常に困難である。「長円」は前記のとおり法師であっ

たとあり修験道を通じて、大和、出羽などとの交流は当然あったものと考えられる。さらに折返銘ではあるが、在銘の太刀が現存しており、その作域は、彦山に関係の深い「定秀」、「行平」に較べてもより古調であることからその時代と所伝は十分肯定できる。

「享保名物帳」の中の昔の名剣の項に、膝丸、蜘蛛切、吠丸、薄緑と四つの名号をもつ太刀があり源義朝の愛刀で源氏重代の宝刀とされていたが、箱根権現へ奉納し「建久四年五月廿八日曽我兄弟敵討ノ後鎌倉ニテ髭切膝丸一具ニ成」と記されている。現代では、この記述は信をおけないが、古来より著名であったことがわかる。作域は、やさしい太刀姿で直刃、小沸つき匂口うるむ。地鉄は詰むが底に肌が覗われ流れごころになる。折返銘で「長円」の二字、佩表に素剣、裏に梵字が彫刻されており茎中にある。古雅な彫法、作域に古九州ものの感が強い。この太刀は徳川御物であったが、五代綱吉より丹後宮津藩主本荘家が拝領し、同家に伝来した。また、古押型にも多く所載されている大徳川家に伝来した。表に長円、裏に千秋万歳を銘する。これもまた斯界に著名な短刀があるが、「長円」後代とされている。「長円」にも名跡が継承されたと思われる。富貴寺大堂に附属する古碑に

□□□□□□

仁治四年卯月十五日

右者□□□□□□

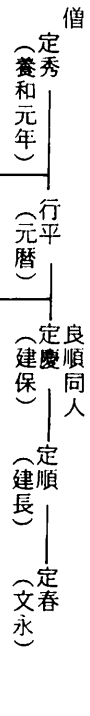
長円

とあり、初代の永延より二世紀半程時代が下がるが、後代「長円」と思われる作刀が伝来していることよりして何らかの関係があると思われる。

定秀

定秀は平安末期の人で、彦山学頭で一門には左記の如く「行平」、「定慶」、「定順」、「行真」等がいる。

「行平」、「定秀」の作品は現存するがその他の刀工は、古銘鑑、押型等に見受けられるだけで現存しない。



『古刀銘尽』によると「彦山三千坊の学頭也、源正坊といふ、三十二才仁平二年より鍛冶となり、行平九才の時なり」とあり、豊前国彦山の学頭で、源正坊と称していたことがわかる。また『本朝鍛冶考』には「高倉天皇の御宇、承安頃の彦山の僧、賢正坊といい、行平の師」と記されている。さらに『豊後鍛冶系譜』によれば、「定秀」ははじめ紀平治大夫宗平と称していたとある。

古来より国東、速見郡の郡司に任ぜられ、荘園時代になってからは開発領主となっているものが多い紀氏の一族で、五位の官位である大夫を称していたことよりして相当有力者であったことがうかがわれる。『刀剣銘尽』には「豊後国霊仙寺別当僧賢正坊、美濃阿闍梨」とある。「定秀」は僧定秀と銘を切っているものが現存しており、当時において僧と公称できるものは、律令による所定の資格を得たものでなければならなかった。前述のとおり「定秀」が彦山と関係が深いことからして豊後国霊仙寺とは杏々地庄夷山霊仙寺であったと思われる。「定秀」はこの寺の僧であり別当職であるとともに、紀大夫と称し在地の所領主であったと推察できる。「余瀬文書」等によると、「源久」、「源沈」等「源」の字をつかっている僧が六郷山関係の寺には多い。

また、一説によれば、「定秀」は、保元の乱に参加して敗れ、東大寺に逃れて出家し、その時、千手院鍛冶について鍛刀法を学んだとある。「定秀」現存の作品をみると大和伝の古風をよく伝えており、「定秀」が何らかの関係で大和千手院鍛冶と接触していたであろうことは十分うなづける。

彦山及び彦山末寺の寺院と宇佐と宇佐宮及び弥勒寺の関係は平安末期において特に著しく、また彦山においては、彦山縁起に三千徒とある如く、平安時代における西国の修験道が、当時の新興勢力である武士層を背景に彦山を中心に発達しており、国東半島においても夷山霊仙寺を中心として修験道が盛んになっていった。

「定秀」が紀氏一族で霊仙寺別当であった。紀氏が、武士層の信仰の厚かった石清水八幡宮と深い関わりをもっていた。夷山霊仙寺が彦山と六郷山において一番関係が深かったことからして、夷山霊仙寺別当である「定秀」が、彦山学頭として迎えられたであろうと十分推察できる。「定秀」が彦山に住していながら豊後国云々と銘切したのは、「定秀」の出身地を示したものであろう。『永徳銘鑑』によれば、僧賢聖とも銘していたとある。

彦山山麓から竜門峡を登ってゆくと、玉屋神社の西方に千手院谷という谷間がある。定秀鍛刀の地であると地元ではいわれている。金屎（かなくそ）も発掘されるという。玉屋神社付近には六〇坊もあったといわれており「定秀」の住んだ坊もここにあったのかもしれない。文久三年の諸上納銀取立帖によると、まだ八谷に二五八坊あったことがわかり昔日の繁栄がしのばれる。

「定秀」の遺例として著名なものに、旧長州毛利家伝来、竹中公鑒旧蔵、今次大戦前にロンドンより持ち帰ったもの（いずれも重要美術品）三口がある。作域は優美な太刀姿で、刃文は直刃、または直刃に小乱れ、沸づいて匂口がうるみ、一見総体に染みているように見れる。殆ど刃区の上五、六センチを焼き落している。地鉄は小杢目肌、小板目肌に詰んだものである。やや弱い地景がみられ、総体に軟らかく弱い。弱い地鉄に匂口のうるむ直刃は再刃ものの条件であるが、「定秀」、「行平」のはこの状態のものが殆どで、再刃かどうかの区別はいたって困難である。帽子は小丸、焼き詰め、小模様の一文字返りなどがみられ、大いに沸づく。刀身彫刻は、日本刀中もっとも古いものの一つであるが、鉏元（はばき）に桜花を彫り、その上に「勝」の

一字を彫ったものがある。茎には肉があり、長銘で刃方がすこし張り気味である。

地鉄の鍛練、細い直刃、軟らかくて弱い感のあること、大いにうるみ締らないことに極めて古調の感がする。

豐後国行平

「行平」は後鳥羽院番鍛冶の一人といわれ、作品にも、もと九条家伝来の焼身であるが元久二年二月年紀のあるものがあり、その製作年代はほぼ明白である。

通説では、僧定秀の子とも弟子であるともいわれているが『豊後鍛冶系譜』によれば、僧定秀の弟盛時の子で、母は京の公卿中山三位の娘、「行平」ははじめ「行重」、のちに「定秀」の俗名である「宗平」の一字を継ぎ「行平」と改名、「定秀」の養子になったとある。「行平」は紀新大夫と称し、紀氏一族で「定秀」と同様夷山霊仙寺に関係が深く、その子とされている「定慶」は、香々地庄公文職であったことがわかり、その所領が子孫に伝承されている。（『大分県史料』「黒田文書」）、夷山麓に紀新大夫の地名が残っており行平鍛刀の地であるとされている。いずれにしても「行平」が香々地庄に密接な関係があったと思われる。

『古刀銘尽』には、「元暦元年（一一八四）上野に流さる」とあり『新古刀大鑑』にも「結審にも参るべき所、殺害の咎によりて上野国刀禰の庄へ遠流されまいらすなり、その間十六年間」とある。また古伝によれば、「行平」は、紀氏一族の有力者であり、源平両氏の内乱の際、その向背を誤り、後白河院の院宣で、上野国に流された。そして、正治元年五十六歳の時許されて帰国の途次、後鳥羽上皇の拝謁を賜わり、御番鍛冶二十四人の一人に加えられ、備前近房と共に四月番になったと伝えられている。その後、承久年間に理由は明らかでないが相模国飯島に流され、貞応三年三月十六日ここで生涯を終っている。法名顕徳院鉄山大居士。推察するに、宇佐本宮が源平両氏の戦いに際し、平家に味方したことよりして紀氏一族である「行平」が、一族の責任をとって上野に配流されたことは十分考えられる。さらに承久の乱前後より大友一族である古荘氏が、智恩寺院主職、夷山霊仙寺院主職と次々に院主職を押領した事実、承久の乱において法皇方に味方して幕府に敗れたことよりして、「

行平」が幕府の所在する相模国に流されたことも十分ありうると思う。また最後の配流地である相模でもうけた子が、相州鍛冶の名工として重きをなした大進坊祐慶と行光であったとされているように伝説の多い刀工であり、資料的な確実さはない。以上のように「行平」の伝来については、全く不明な点が多いが、遺例は「定秀」以上に多く現存している。「観智院本」によれば「きしん大夫、手をかきえざるゆえにめいもかくの如し。にせものめいをよくうつなり」とあり、古来より偽物の多かったことがわかる。また『宗五大草紙』には「御物に成り候太刀の銘」として、即ち、足利将軍の指料として使用できる刀鍛冶二十三名中にも「行平」の名がみえることよりして、昔より極めて大切に伝来されてきたことがわかる。「行平」の遺例として、最も有名なものに永青文庫所蔵で現在国宝に指定されている「古今伝授の太刀行平」がある。この太刀は、細川幽斎の愛刀であったが、慶長五年、幽斎が丹波の田辺城籠城の際、歌人として著名であった幽斎が戦死でもすれば古今伝授が絶えてしまうことを心配され、烏丸光広が勅使として遣わされた際、古今の秘伝を伝授したしるしとしてこの太刀を贈った。この太刀は長さが七九・九センチ、反り二・九センチで、鎬造り、庵棟、小鋒となり、腰反り高く踏張のある太刀姿。鍛えは板目肌よくつみ、わずかに流れごころがあり、地沸が細かにつき、ねっとりとして潤いがあり、白けごころを帯び、刃文は直刃調に小乱交じり、匂口うるみごころに小沸つき、わずかに砂流しかかり、大きく焼落す。帽子は直ぐに焼きづめごころとなり、掃かけかかる。表裏に棒樋を掻流し、表に腰に梵字を陰刻にし、下に真の倶利迦羅を浮彫りにし、裏に同じように梵字を陰刻にし、その下に異様の佛像を浮彫りにしている。刀身彫刻はこの時代極めて珍らしく、父とされている「定秀」にその源泉的なものを認めることができるが、「行平」ほど巧くなく、「行平」が刀身彫刻の祖といえる。そしてこの異様の仏像は、不動、地蔵、役行者、小角などの説が入り乱れているが、確説はない。また、この当時の太刀は、佩表に銘をきるのが常であるがこの「行平」はどういうわけか逆になっている。また名物となっているものに「地蔵行平」と号するものがあるが、殆どこの太刀と同様の彫物があり、この彫物を地蔵とみての号である。茎は生ぶ、大きく雉子股形となって先細って反りつき、佩裏の棟寄りに「豊後国行平」と長銘にきっている。このほか、日枝神社、二荒山神社との他多く現存している。

古来より九州は大陸との外交貿易上の窓口であると同時に国防の最先端であり、早くから刀鍛冶が多く発生し最も古い鍛刀法が伝えられており九州物で総称されている。また作柄も一部を除いて（三池典太光世）共通しており、太刀姿細身で腰反り高く踏張があり、上品なものが多い。鍛えは板目で、大体流れごころがあり、軟らかくねっとりして、総体に白気ごころがあり、刃文は直刃を主として匂口が総体にうるみ、鋒元を大きく焼落しているものが大部分である。そして「行平」の作は九州物の典型的なものであり、この時代のものとしては、最も有銘作が現存し、しかも皆、極めて優作である。太刀はもちろんのこと短刀も現存している。ことに四国西条家伝来とされている一口は名作とされている。

銘鑑中には、「行平」の一門として「定慶」、「定順」、「安則」、「正恒」、「為恒」、「安光」、「光友」などをあげているが、その正しい在銘遺例はもちろん、その伝来も不明である。

当地にはこの時代以下南北朝期の「了戒」、「信国」一派、古高田物、末高田物、豊後来一派等江戸時代まで通じて八百人余にものぼり、全時代を通じて備前、美濃につぎ第三位の刀工数を誇っている。しかし、ごく一部を除いては全くといっていいほど、当地の関係資料の調査がなされていない。この拙ないレポートを序として、蝸牛の山のぼりがごとく、微力ではあるが調査に取り組みたい。　関係資料等ご教示をお願いすると同時にご叱正を賜わりたい。

（県立芸術会館主事・[redacted]）